

三島由紀夫における国境認識：「アメリカ」を視座として

著者	杉山 欣也
著者別表示	Sugiyama Kinya
雑誌名	Anais do ENPULLC
ページ	267-281
発行年	2016-09-21
URL	http://doi.org/10.24517/00051673

三島由紀夫における国境認識 －「アメリカ」を視座として

Kinya SUGIYAMA (Universidade de Kanazawa) ¹

周知のように、三島由紀夫は1951年から1952年にかけて世界旅行を行って以来、何度となく世界各地を旅し、その見聞を作品の素材とすると同時に、自らの思想を磨き上げた。ここでは、その思想の一部に見える国境認識を取り上げ、その特質を考察する。三島由紀夫はその死に当たって発表した「檄」において、沖縄駐留米軍の問題を取り上げているが、そこに現れた国境認識は初の世界旅行を計画している最中にはすでに育まれていたものである。とくに、6回にわたって訪問したアメリカ合衆国での体験は、日本との関係性も相まって三島の国境認識にとって重要であり、それらは小説の表現にも表れている。そのことを「潮騒」「美しい星」から明らかにする。なお、発表者が継続的に追求しているテーマのため、既発表内容との重複が多い。そのことをご了解いただければ幸いである。

1 金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授。
kinkin-s@staff.kanazawa-u.ac.jp

1

その衝撃的な死のため、三島由紀夫はナショナリストとして世界的に知られている。しかし、その経歴を見ると、彼が排外的で偏狭なナショナリストではなく、何度も海外旅行に出かけたことや、外国語（とくに英語）の運用能力に富んだ、いわば国際人であったことがわかる。

三島由紀夫の海外旅行という点では、アジア太平洋戦争の敗北後ようやく国際社会への復帰を果たした1951年から翌年にかけて、すでに世界旅行を行っていることや、ニューヨークに半年間も滞在して自作の戯曲『近代能楽集』の上演を目指したこと、それらの機会を含めて生涯に3回も世界一周旅行を行ったことが特筆される。訪問地は、アメリカ合衆国、メキシコ、プエルトリコ、ドミニカ、ハイチ、キューバ、ブラジル、ギリシャ、イタリア、イギリス、フランス、ポルトガル、スペイン、スウェーデン、西ドイツ、エジプト、インド、タイ、カンボジア、韓国などである²。この時代の日本人作家としてはかなりの海外旅行経験の持ち主であると言ってよいだろう。

そのなかで、訪問回数、滞在期間ともに最長なのはアメリカ合衆国である。三島由紀夫のアメリカ旅行は都合6回に及ぶ。ここに列記してみよう。

- ・ 1952年1月6日～25日（ただし船旅であったため、1月1日にホノルルに寄港）。主な滞在先はホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、フロリダ。このあと、プエルトリコを経てブラジルへ。紀行文『アポロの杯』など。
- ・ 1957年7月9日～12月31日。滞在先はホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルスを経て7月19日、ニューヨーク着。この間、プエルトリコ、ドミニカ、ハイチ、キューバ、メキシコの中米諸国を経て陸路より

² 『決定版三島由紀夫全集』42巻年譜（2005年）などを元にピックアップしたが、遺漏や記録に残らない「お忍び旅」の可能性もあり、断定はできない。

ミシシッピー州、ニューメキシコ州、ニューオリンズを旅行。このあと、ポルトガル、スペインなど南欧を旅して帰国。紀行文『旅の絵本』など。

- 1960年11月1日～12月2日。滞在先はハワイ、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク。このあとポルトガル、スペイン、フランス、イタリア、エジプト、香港を経て帰国。「美の襲撃」など。
- 1961年9月15日～29日。「ホリデイ」誌企画のシンポジウム参加のため。サンフランシスコ、バークレー等。バークレーでシンポジウムに登壇。『決定版 三島由紀夫全集』31巻にいくつかのエッセイ収録。
- 1964年6月20日～7月2日。クノップ社との出版打ち合わせのため、ニューヨークへ。とくに紀行文は見当たらない。
- 1965年9月5日～9月22日。世界旅行の一環としてニューヨーク等へ立ち寄る。出国後、スウェーデン、フランス、西ドイツ、タイ、カンボジアへ。紀行文「手で触れるニューヨーク」等。ラジオインタビュー、講演などを行う。

こうして列挙してみると、三島由紀夫は通算9ヶ月以上アメリカに滞在しており、訪問先もロサンゼルス、ニューヨークといった大都市中心ながら、陸路メキシコ国境を越えて入国し南部を訪問するなど、アメリカ各地をつぶさに見ていることがわかる。

こうした体験をささえ、また体験の産物でもあるのは、英会話の能力であろう。二度目のアメリカ滞在の主要目的は自作戯曲『近代能楽集』のニューヨーク上演であったが、その実現に向けて相当ハードな交渉が必要であった。これにはドナルド・キーンという得難い協力者の存在も重要であったことはまちがいない。それでも三島の紀行文『旅の絵本』などを読むと、現地プロデューサーとの交渉や各種レセプションへの参加、あるいはブロードウェイでの観劇などの機会を通じて英会話の能力が磨かれていることがわかる。

この英会話能力は、あるいは海外滞在の回数や日数以上に当時の日本においては国際派作家の肩書きを三島に与えることに寄与したかもしれない。たとえば、ノーマン・メイラーやテネシー・ウィリアムズなど、来日したアメリカ人作家との対談相手に三島が選ばれるようになったことが掲げられるだろう。また、アメリカでの生活体験によって培われた人脈が作品の英訳や上演の機会、あるいは講演会や雑誌での紹介等を通じて、アメリカでの知名度を高めることに寄与したはずである。三島の「国際派作家」イメージ形成の背景に、これらアメリカでの体験があることはたしかであろう。

なお戯曲の上演について付記すれば、第3回目の渡米は、第2回目の渡米では果たせなかった『近代能楽集』の上演を実現する旅であった。1960年11月15日、アメリカン・ナショナル・シアター・アンド・アカデミーのニューヨーク支部による実験劇場マチネ・シリーズ(会場はシアター・ド・リース)において、「班女」「葵上」が上演されたほか、11月29日には同シリーズにおいて上演された「シェファーズ・カメレオン」の上演後、作者のイヨネスコと舞台上で座談会に登壇している。これらのことも、作品の知名度上昇や英会話能力のほどがうかがいしれるエピソードである。

2

このような海外旅行熱はいつごろから三島由紀夫の胸中に萌していたのか。そのとき、アメリカ合衆国はどのように位置付けられていたのか。本章ではそのことについて考えたい。

その際に参考になるのは、既発表の三島テキスト(ことに評論)と同時に、川端康成との往復書簡である。この書簡集は現在、『川端康成・三島由紀夫往復書簡』(2000年)として新潮文庫の一冊となっている。この書簡集では、国際ペンクラブの活動に熱心だった川端に触発されるような形で三島が海外への関心を語っている。

それらによれば、三島が海外旅行の希望を語り始めるのは1951年のことである。まず、評論「檀一雄の悲哀」(1951年2月)では、檀一雄が捕鯨船に乗って南氷洋に行くことになったことに触れ、「私はその計画を考えていたが、挫折した。」とある³。また、同年にエディンバラで開催される国際ペンクラブ大会への私費参加を川端に誘われた三島は、その返事として3月18日付書簡に次のように記している。

エディンバラに行ったらどうか、という箇所を拝見し、ワアーツとよろこんでしまい、もう一寸よみましたら、百万円要ることがわかり、ガッカリしてしまいました。私の方では、宝クジを買うほかに手がございません。——それともどこかへ頼みようがございましょうか？

さらにこの書簡では、

今度アルゼンチンへお供しとう存じます。/ヨーロッパ、それも荒廃のヨーロッパを隅々までみたいというのが最大のねがいですが、いつ叶えられますことか。そのうちにへんなふうに復興してしまうと、ヨーロッパも魅力がなくなります。ベルリンや荒廃したドイツの諸都市、イタリア、共産政府下のギリシャ、こういうところが最も魅力で、アメリカにはちっとも魅力がありませんが、それでも行けといわれればよろこんでまいります。竹山道夫さんの「希臘にて」をお読みにになりましたか？一生に一度でもよいから、パンテオンを見とうございます。

³ 檀一雄は実際に1961年12月から翌年春にかけて捕鯨船で南氷洋にいき、雑誌掲載の原稿をもとに『ペンギン記』(1954年)を刊行している。

と記しており、三島の関心のありようが浮き彫りになる。その後、川端にヨーロッパ行きを強く勧められ、三島は可能性を模索した。1951年9月10日付川端宛書簡には、

洋行のことは、例の青年芸術家会議に願書を出しましたが、十一日に英語の試験があり、これで落第必定了。だって外人が試験官なのですから、ごまかしようがございません。もう一つ別な話がございしますが、この方もまだ未定でございます。

とあり、本人の想像通り選考に落ちている。のちに英会話の能力を自慢とした三島にしては意外であるが、それ以上に、こうして海外旅行の機会をうかがっていたことは注目に値する。とくに、行ってみたい場所として敗戦国の現状に触れたいという願望があったことは興味深い。つまり、三島の海外旅行熱には、敗戦国・日本の再確認という意味があったわけである。

ここで三島が海外旅行熱を吐露している1951年は、日本がサンフランシスコ平和条約に調印し、いちおうの独立と国際社会への復帰とを果たした年である。サンフランシスコ平和条約は年4月28日に調印された。三島の海外旅行への関心は、これと無関係ではないだろう。日本人の海外自由渡航はこれよりはるかに下ることになるが、ともあれ、これによる「国際社会への復帰」は、戦時中に日本浪漫派の末席に連なる少年作家として登場した三島にとって、戦後日本を考えるきっかけと、その具体的方法として海外から日本を見つめ直すための海外旅行を志すに至った理由となったにちがいない。

ところで先ほど引用した川端宛書簡には、「もう一つ別な話がございしますが、この方もまだ未定でございます。」とある。これがおそらく、『アポロの杯』（1952年）に結実する、世界旅行の計画であろう。三島は朝日新聞社特別通信員という肩書を得て、世界各国を回った。そしてその体験は各地から送られた雑誌原稿によって逐次日本に報告されている。

しかし実際に『アポロの杯』を読んでも、三島は国際情勢などほとんど記してはおらず、そもそも諸国の事情を正確に伝えようとしていない。むしろ、『アポロの杯』において三島は自己の感受性に身を委ね、受動的なその心の動きを叙述している。のちに三島は「私に余分なものといえば、明らかに感受性」であり、「こいつは今度の旅行で、靴のように穿きへらし、すりへらして、使い果たしてしまわねばならぬ」（『私の遍歴時代』1963年）と述べている。『アポロの杯』は、リオデジャネイロのプラサ・パリスでの体験に代表されるように、外界の触発によって移り変わる心情の描写において優れている。

一方、ブラジル日本移民の勝ち組・負け組問題を記した「遠視眼の旅人」（1952年）が『アポロの杯』に収録されなかったことを考えると、『アポロの杯』において、あえて「海外から日本を考えよう」という当初の意図を外し、内面的な叙述によって旅行記を成立させるという試みに切り替えたと考えられる。

3

さて前章で「アメリカにはちっとも魅力がありません」という三島書簡を紹介したが、結局のところ三島がつごう6回、9ヶ月もアメリカ合衆国に旅行したことは第1章で紹介した通りだ。この章ではその内実を考える。

まず注目したいのは第2回目のアメリカ旅行である。ニューヨークを拠点に半年近くホテル暮らしを続けたこの旅行は、前述したように中米旅行を挟み、『アポロの杯』におけるブラジル表象のつづきのような熱帯の幻影を三島に描かせているが、ここで取り上げたいのは『旅の絵本』に収録された「メキシコ、アメリカ国境を渡る」と題する短い一挿話である。1958年1月30日付「日本経済新聞」に発表されたこのエッセイは、前述の中米旅行の帰途、メキシコ北端のシウダード・ファレスからアメリカのエル・パソへと陸路を經由して国境を渡った感想を記したものである。

このエッセイは、次のような一節から始まる。

われわれには国境というものの概念がなかなかつかめない。外国旅行をしても、飛行機旅行の今日では、いつも国境は飛行中の雲の下にあって、目に見ることができない。今度の旅で、私は生まれてはじめて、地図上の太い線である国境というものを、自動車のタイヤの下に感じて渡った。

樺太、朝鮮半島などの支配により1945年以前の日本には陸上に国境線があった。また、ここで「生まれてはじめて」陸上の国境を渡った背景に、三島がアジア太平洋戦争に徴兵されなかった結果という側面があることは否めないが、むしろこの一節には現在の日本人の虚をつく部分がある。

三島はメキシコシティから飛行機による二度の着陸を経て、乗り合いタクシーに乗って国境へ赴いた。このエッセイにおける三島のメキシコに対する印象とアメリカに対するそれは好対照である。すなわち、

今でも文明の恩沢に浴さない広大な地域を要している魅惑的な国、闘牛と奇怪なマヤの廃墟とソンプレロと音楽と踊りと強烈なテキラ酒と、市場と残酷の入りまじった国であった。私はこの赤っ茶けた原野と二重映しに、あの祭りの日のおどろくべき豊富な色彩に湧きかえっているメキシコ・シティーや、ユカタン半島の無限の緑のジャングルから突き出た青黒いマヤのピラミッドを思いうかべていた。

という、それまでの体験と現実とが二重写しとなった幻想的なメキシコの荒野は、ひとたびアメリカに入れば、

ドラッグスとか、ハンバーガーとか、趣のない看板が並んでいるに決まっている。

と想像されるようになる、その落差を見ても明らかである。ここには『アポロの杯』におけるブラジル体験以来の三島における中南米イメージの問題があり、また「仮面の告白」(1949年)などで表現された三島のディオニュソス的想像力の反映といった問題が横たわっているが、それはここでは触れない。本発表の趣旨に即して重要なのは、国境を渡るその行為を三島が自身に課したことと、その時の手続きの様子などを描写していることだ。

係員が旅券の呈示を求めた。二組の男女は誇らかにアメリカン・シチズンと名乗って、そのまま通され、私一人だけが(杉山注:乗合タクシーを)下された。橋の袂にコンクリートの老化がついており、そこへ一人でとぼとぼ入っていくと、巨大な清潔なエスカレーターが目の前に立ちはだかって、私がそれを昇るように、無言で威圧的な命令を下していた。

アメリカ風の清潔な無装飾な大きなビルの広間が、エスカレーターの上にあらわれた。ああ!もうここはアメリカだった。一時間も待たされて入国手续をするあいだ、向うの窓口にはメキシコ人の長い一列がひしめいていた。彼らはおそらく私と別な手続の入国許可をとろうとしているのだろうが、アメリカ風のオフィスの中のそれらのメキシコ人たちは、急に威厳を失い、力なく、汚らしく見えた。

ここに描かれているのは、幻影と実像が二重写しになった極彩色の中米色が一気に色あせ、無味乾燥のアメリカへと戻る際の幻滅である。誰も旅の終わりに感ずることにすぎないといえばそれまでではある。だが、入国手続きをとるメキシコ人たちの「威厳を失い、力なく、汚らし」い姿を通して、大国アメリカと国境を接して劣位に置かれるメキシコの姿

を象徴的に描いているとすれば、似たような手続きを踏んで入国する三島自身もまた人目には「威厳を失い、力なく、汚らし」く見える可能性が示唆されている。

さらに、アメリカに入国してエル・パソのレストランで食事をした際、ペソをドルに換えてもらえまいかと頼んだとき、レストランの女性に“*We use Amerian money!*”とはねつけられ、「いくらなんでもそれくらいのことは、小学校を出ている私には、よくわかっているのであったが……。」と三島は愚痴をこぼす。「……。」と、末尾ではなにかが語られずに終わるが、国境近くの町の住民におけるメキシコに対する偏見や差別感情の存在の発見と、自らもそのような立場に置かれた不快感があると同時に、メキシコとアメリカの関係から日本とアメリカの関係をも類推したであろうというのが、本発表におけるこの「……。」の解釈である。そしてそれは三島晩年の、サンフランシスコ平和条約の締結と同時に締結された日米安全保障条約—日本がアメリカの同盟国として「核の傘」の下に入り、米軍基地の駐留を認める—、いわば対米隷属的な日本への批判にも通じる感慨であっただろう。

次に注目したいのは第3回目のアメリカ旅行である。妻を伴っての世界旅行の一環で、アメリカ出国後はポルトガル、スペイン、フランス、イタリア、エジプト、香港を巡っている。このときの三島はまずハワイに3日間滞在し、11月5日にサンフランシスコへ行き、7日にロサンゼルス、さらに10日にニューヨークへ移動し、15日に前述した『近代能楽集』の上演に立ち会っている。つまりこの旅行は前回挫折した『近代能楽集』上演の希望を叶えた旅でもあった。

実はこのとき、アメリカは大統領選挙の真っ最中だった。ケネディ大統領誕生の瞬間を三島はアメリカで迎えただけでなく、ちょっとした実害も被っている。というのは、ロサンゼルスで宿泊予定だったアンバサダーホテルが共和党の選挙対策本部となっており、7日にニクソンが宿泊したため、向かいにあるホテルへ移動させられている。このことを三島は1960年11月24日付川端宛書簡で次のように記している。

ロスでは、あいにく共和党の選挙本部のホテルに、ニクソン氏と同宿してしまい、食事のサービスもめちゃくちゃに遅く、選挙さわぎでホテル中が煮立っていて、とんだトバッチリを喰いました。ディズニーランドはとても面白く、世の中にこんな面白いところがあるかと思いました。

偶然とはいいながら、三島が大統領選挙で沸き立つアメリカを見たことには大きな意味があると考える。三島はアメリカ本土に先立ってハワイを訪問しているが、長らく準州の位置に置かれたハワイがはじめてれっきとした州として大統領選挙の選挙権を得た、まさにその時だったからである。これについても三島は「大統領選挙」(1960年)というエッセイで触れており、内面をうかがい知るほど詳細な叙述ではないものの、それらを意識していたことがわかる。

この旅行が第2回目のアメリカ滞在のつづきとしての側面があるとすれば、大統領選挙を通じてアメリカの民主主義に触れるという意味がまずあり、一方で民主主義の元でも「準州」として序列化され、1898年の併合以来、大統領選挙の選挙権を得るために62年の歳月を必要としたハワイ州に触れるという意味があった。

第2回目のアメリカ旅行では「国境を越える」という、戦後の日本人にとっては象徴的ともいうべき行為を通してアメリカという国家の外縁に三島は触れている。そしてこの第3回目のアメリカ滞在では、ひょっとしたら日本もそうであったかもしれない可能性、たとえば植民地や準州といった形でアメリカに隷属した状況に日本が留め置かれる可能性について、想像を巡らせた可能性があるということである。それもまた、晩年における三島の戦後日本批判に通じる側面がある。

4

さて、ここまで三島のアメリカ旅行に即して三島のアメリカ認識や国境認識を論じてきたが、アメリカと日本の国境をめぐって、さらにいくつか考えなければならない点がある。それは、日本国内におけるアメリカ国境の存在である。先述したように、日本はサンフランシスコ平和条約によって占領を解かれる一方、同時に締結された日米安全保障条約によって各地に米軍基地の駐留を認めることとなった。また、沖縄はひきつづきアメリカの軍政下に置かれることとなり、日本国の領土でありながら日本の司法・行政の及ばない地域が存在することになったわけである。

このうち、沖縄については、三島の死に際して発表された有名な「檄」でも言及されている。すなわち、

沖縄返還とは何か？本土の防衛責任とは何か？
アメリカは真の日本の自主的軍隊が日本の国土を守ることを喜ばないのは自明である。あと二年の内に自主性を回復せねば、左派のいう如く、自衛隊は永遠にアメリカの傭兵として終るであろう。

とある通りである。

沖縄は明治時代に「琉球処分」によって日本に編入された地域である。それ以来、日本領土でありながら差別的な待遇を受けてきた。さらに、アジア太平洋戦争において戦場となり、「鉄の暴風」と呼ばれる激しい戦闘によって、日米両軍によって多くの民間人が殺された。戦闘の終了と同時に沖縄はアメリカの軍政下に置かれた。

沖縄返還は三島の死後、1972年に実現されたが、現在でも沖縄本島の18パーセントを米軍基地が占めており、基地の島内移転をめぐって沖縄県と日本政府が激しく対立する事態となっている。「檄」で三島がアメリカ軍の駐留と自衛隊の傭兵化を批判した際に沖縄に触れたのも、こうした背景

からであるが、その意識は、実はすでに「潮騒」(1954年)にも描きこまれている。

この点について発表者は論文を発表しており、インターネット上で読むことができるのでご一読いただきたい⁴。

そのためここで詳述は避けるが、主人公の新治が船を遭難から救うために飛び込む海が沖縄であり、「鮮やかな瀝青の光沢を放」つアメリカ兵の家屋と「打ちひしがれて、つぎはぎのトタン屋根が風景に醜い斑らをえがいている」日本人の民家とを対比的に描写し、「戦時中米軍が最初に上陸した地点」である運天に乗組員たちが上陸できないといった設定で批判していることだけを指摘しておきたい。

さらにもうひとつ、日本国内におけるアメリカ国境の存在が指摘できる。それが、全国各地に存在する米軍基地である。たとえば村上龍「限りなく透明に近いブルー」(1976年)は東京都に存在する横田基地周辺を舞台に取り、オキナワという青年を登場させることで、米軍の駐留基地問題を背景にした風俗状況を描いたが、三島由紀夫もまた、米軍基地問題を背景とした小説を書いている。それが「美しい星」(1962年)である。

「美しい星」はベルリン危機、キューバ危機など米ソ冷戦体制によって引き起こされた核戦争の恐怖を背景に、自分たちが太陽系のそれぞれ別の星から来たと信じ、世界救済を図る大杉一家の物語である。三島由紀夫としては異色のSF風作品であるが、大杉一家は語り手によって揶揄的に描かれており、「潮騒」同様に一筋縄ではいかない複雑な構造を有している。また、自らを宇宙人であると信じ、地球上の危機を概観的に見る大杉一家の意識は、すでに1955年ごろの三島の評論等でやはり核戦争による地球消滅の可能性とともに語られている意識の具体化であるともいえ、三島自身の愛着も深かったと言われる作品である。

4 杉山欣也「『潮騒』の語り手と戦後社会」(2012年) <http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/43746?locale=ja>

ところで「美しい星」の各場面に選ばれた舞台が、かならず米軍基地近くであることを指摘した論文がある⁵。そのなかでも特に明示的なのは、第4章に描かれる内灘である。

内灘は石川県の日本海に面した沿岸部にある町の名で、朝鮮戦争時、その海岸に米軍の試射場が置かれたことと、これに対して内灘闘争と呼ばれる大規模な反対運動が起こり、朝鮮戦争終了後ではあるが1957年に米軍の撤退に至ったことで知られている。「美しい星」の登場人物で、自らを金星人であると信じる大杉暁子は、やはり自らを金星人であると自称する金沢在住の青年・竹宮に案内され、内灘を訪れる。「美しい星」の作中時間は1961年であるが、内灘闘争の跡地を次のように描く。

——二人が丘を下りて、いよいよ海辺の砂丘へ足を踏み入れたのは、三時をやや廻るころであった。労働者の影一つ見えないけれど、路傍には左のような立札が読まれた。

「河北郡 内灘村

内灘試射場保障事業防風林工事

昭和三十六年八月着工

昭和三十七年三月竣工予定」

暁子は目を輝かせてこれを読んだ。海へ向う道にトラックの轍が何本も深くめり込んでいたのはこのためだったのだ。

三島が取材のために内灘を訪れたのは1961年12月である。右の引用にあるように、まさに防風林工事の真っ最中であつた。また、内灘海岸の眺望は次のように記される。

この名高い大砂丘には、今やこまかい植林の苗揃いに分断され、見わたすかぎり起伏のなりに篠垣がつづいていた。砂には瓦や小石がまじり、トラックの轍はなお海へ向かっていた。ここからは碎けかかる波頭は見えるが、波打際は砂丘に隠れ、碎ける波音はかなり遠かった。

5 九内悠水子「三島由紀夫「美しい星」論：円盤飛来地の意味するもの」(2009年) <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00030559>

その名声とはいってもなく内灘闘争によるものである。また、海へ向かうトラックの轍にはここで試射されたあと朝鮮半島へ運ばれた砲弾輸送のイメージがただよい、また遠く聞こえる碎ける波音は朝鮮戦争時の砲声が想像される。

朝鮮戦争において日本はアメリカ軍の後方支援基地として砲弾の製造・試射といった役割を果たし、好景気を迎えた。それが日本の戦後からの立ち直るきっかけとなった。右の引用にある風景描写は、そうした日本の状況をもほのかに浮かび上がらせる。反対運動の結果、試射場の撤退にこぎつけ、米軍の占領から解放されたこの海岸を「名高い」と語って強調することで、基地撤退もままならない戦後体制下の日本に対する屈折した感情が読み取れる描写であるといえる。

この内灘では空飛ぶ円盤が出現する。大杉一家は空飛ぶ円盤を「平和の象徴」と呼ぶが、それがほかならぬ内灘を舞台とすることで、核の傘のもと繁栄にひた走る日本に対する批判意識を、この箇所から読み取ることができるわけである。

こうして、本発表のテーマである三島由紀夫の国境認識を、主にアメリカとの関係から読み解いてみた。アメリカと日本との関係は現在も従属的關係にあり、基地の存在は沖縄を中心に日本国内において大変な問題となっている。また、アメリカ・メキシコ間の国境についてはアメリカ大統領選挙における候補者の排外的な主張から、最近も世界的な注目を集めている。一方、「海外」という言葉が指し示すように、戦後の日本国の国境はすべて海であり、日本で生まれ育った者は平素ほとんど国境を意識することはない。その間隙について、近年では旧植民地に出自を持つ日本国内在住者に対するヘイトスピーチなどが生じている。また、安倍政権は憲法の改変を通じて戦後体制の幕引きを図っているといわれる。戦後体制のなかで国際人として生き、ナショナリストとして死んだ三島由紀夫の国境に関する言説は、さらに深く追求される必要があると考える。